

小笠原絶滅危惧植物

東京大学・法政大学名誉教授

長田 敏行

小笠原諸島の植物が絶滅危惧に瀕していることは耳にするようになって久しい。筆者は22年前に現地調査に赴いてつぶさにその状況を見る機会を持ったが、その記憶は未だに鮮明である。それを思い起こして今回の話題としたい。参加した理由は、東京大学小石川植物園の園長を併任で勤めていた時、環境庁からのサポートも受けていたので、年度末の報告書には私の名前が載ることになる。事情は理解しているとしても、やはり一度は現地を見ておくべきであろうということとして、1999年2月初旬に訪問することとした。

まず、早朝に竹芝桟橋に向かい、東海汽船の小笠原丸に乗りこみ船中の人となった。ここで、小笠原へ向かったもう一つの背景も述べる必要があるだろう。というのは、そのしばらく前に東京都の部長という方が大学の研究室の方へ見えた。実は、小笠原空港設置計画があるが、その空港予定地に絶滅危惧植物のムニンツツジ (*Rhododendron boninense*, ツツジ科) (図-1) があるので、その繁殖計画に研究費を出すから空港設置に協力してもらえないかというものであった。それには丁重にお断りの返答をしたが、やはり自ら現地を見ておかなければならないと思ったのである。

小笠原諸島

そもそも、小笠原諸島とは何であろうか。約1000万年前の海底火山が海上に頭を出したのが出発で、やがて島となっ

た。本土から1000km離れているので、まさに海洋島であり、「東洋のガラパゴス」とよばれるのもガラパゴスと比べたら規模は小さいが、その類似性からである。そして、長いこと無人島であり、そのため英名‘The Bonin Islands’は無人島が転じたものである。小笠原とよばれるようになったのは、かつては信濃国の守護大名であった小笠原氏の末裔が江戸初期知多半島に領地を持っていた時代に、徳川家康に新しい島を見つければ領土としてよいと言われて、太平洋に乗り出し発見したことによる。このため、江戸後期にイギリスが一時領有権を主張したり、かつて欧米系の捕鯨船の中継地となったりと話題は豊富で、実際に最も古い住民はアメリカ出身だったり、デンマーク出身であったりする。そして、人々が恒常的に住みだしたのは幕末から明治初期にかけてであり、八丈島より移住した人が多いとのことである。それら住民は養蚕のためにクワの木を持ち込み、ヤギなどを持ち込んだが、それらがその後の種の絶滅に重大な影響を与えることとなった。そして、最も大きな影響を与えたのは第二次世界大戦である。最前線となったため、住民は全て移住を強要され、軍関係者のみの居住となり、自然は放置されるままになった。そして、1945年の敗戦とともに長く米軍の駐留となった。それで、日本に返還された1968年に調査すると、多くの植物が絶滅に瀕していることが見出された。例えば、ムニンノボタン (*Melastoma tetramerum*, ノボタン科) はただ1株のみ、



図-1 ムニンツツジ



図-2 小石川植物園で繁殖させている小笠原絶滅危惧植物



図-3 小笠原父島ツツジ山にて



図-4 ムニンノボタン



図-5 小学生との移植作業

ムニンツツジも1株となってしまっており、絶滅に瀕した植物種の数に相当数にのぼる。ここでムニンは無人を意味する。概要はいくつかの文献で見ることができるので、その一つを挙げておく(小野1993)。そして、導入されたクワは固有種のおがさわらグワと交雑し、ヤギは繁殖して植物を食べまくる事態となっていた。それで、東京大学小石川植物園では下園文雄氏らの主唱で現生地の植物保護を図ったが、結局小石川で繁殖させて、現生地へ戻すというのが当時としては最適ということになって動いていたのである(図-2)。

小笠原諸島父島到着

往路の船中では万事物珍しくキョロキョロしたが、八丈島が見えても、なお、道半ばと聞き1000kmはやはり遠かった。そして、25時間後に父島二見港に到着した。この時、小笠原丸は小笠原への生活物資補給の主力手段であることを知って、その地理的状况を実感した。その日は、小笠原支庁へ赴いて挨拶をし、父島南部のツツジ山へ向かった。山としては決して高くはないが、岩山に近いツツジ山へよじ登った。そこで、唯一残ったという1株を見て、植物の状態を計測したが、そこはほとんど絶壁の上であった(図-3)。改めて、この場所が空港予定地であるとはいったいどういうことであるかと実感した。果して空港の提案者はこの現状を知っているのかと思い、都に対して否定的対応をしたことは正しかったと思に至った。幸い、既にご存知のように、空港計画はなくなっている。その上で、ムニンツツジは、その繁殖に難問ぞろいであることは、下園文雄さんに伺った。まず、土壌の選択はむづかしく、小笠原から取り寄せたことで初めて成功したのである。しかも、生物学的に興味のあることに、そこに菌類が寄生することが、ポイントであったのである。これは、まさに教科書的で、ホウキタケ属の一種(*Clavaria* sp., 担子菌)が付いて菌根となることが生存の必要条件であるとは、植物と菌類の共生を良く示している。

その後、尾根伝いに北上し、やや下ったが、その途中木性シダのマルハチ、タコノキが繁る亜熱帯の植物は、やはり南

国であることを実感させた。それ以上に、獣道に近い道で出くわしたのは重火器の残骸で、まさに戦時中の最前線であったということが納得できた。そして、その夜は東京都の関係者との懇親の場があった。翌日は、東京都の試験場を見学した後で向かったのは、小石川植物園で繁殖したムニンノボタン(図-4)の株の移植作業で、小笠原小学校生徒との共同作業であった(図-5)。なお、その後ムニンノボタンでは種子繁殖が観測されたので、媒介する鳥(メジロ類)も存在していることを意味するのであろう。また、ムニンノボタンの別株が発見されたが、それは形態的にも最初見出されたものと異なっていた。これはまさに、植物は現生地に戻すべきであるという根拠を示す事実である。

その他に、海洋島の特徴をいくつか知ることとなったが、冬場は鯨が集まるので、ホウエルウォチングに好適な場所であることを知ったが、実際に勇ましい汐吹を数度観察することができた。この旅行の結論としては、小笠原といっても見ることができたのは一島だけで、その他にまだまだ島はたくさんあり、ほんの一部を見たに過ぎないので、全体を語ることを出来ないが、率直な感じとしては、やはり船旅で25時間かかることは貴重であり、それゆえに自然環境が守られるということを実感した。また、そのために、UNESCOの世界自然遺産に選定されたのであろうと強く思い、またその状態の維持はなお今後の課題である。なお、筆者は帰途に、もう一度25時間の船旅を楽しむことができたが、同室となった方は仕事での出張ということであったが、出港してから竹芝につくまで、毛布をかぶって寝ていたことには、そのような人もいるのだと驚いた。22年の記憶という既にセピアの色がかかっているとは思っていないが、昨日のこのように思い起こせるのは、やはりその印象が強かったためであろうと申して、本稿を閉じる。

文献

小野記彦 19893. 孤島の植物たち, 岩波新書.